

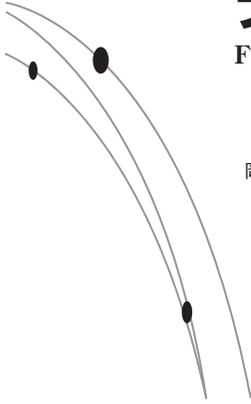
連載

フィールド・アイ Field Eye

英国から—①

岡山大学大学院 奥平 寛子

Hiroko Okudaira



〳ロンドンの保育事情

ロンドンで2年間の在外研究の機会を頂くことになった。行くことが決まって、まず頭を悩ませたのが子供の預け先をどうするかということだった。次男はまだ1歳。日中、預かってもらうところを探さなければ、仕事ができない。そもそも、こんな小さな子供を連れて在外研究に行くなんて何考えてるの? という話もあると思うが、各方面に迷惑をかけて得られた大切な機会だ。家族とも話し合って行くこと決めたのだから、後には引けない。すぐに、保育園探しが始まった。

調べ始めてびっくりしたのは、その保育料の高さだ。派遣先の大学付属の保育園だと、朝8時30分から夕方5時20分まで平日週5日預かってもらうと、月々約1400ポンド(派遣開始時のレートで27万円ほど)もかかる。近隣の他の保育園も調べてみたが、どこも金額は似たり寄ったりで、中には月1700ポンドを超える保育園もある。それでも、メールで問い合わせると、どこの保育園も長いウェイティングリストがあるという。

そんなに高いなら、さぞかし素晴らしい設備やカリキュラムが整っているのだろうと思うのだが、ホームページの説明を見る限り、日本の保育園とあまり大きな違いはなさそうだ。実際、在外研究が始まってから、大学付属の保育園をのぞいてみたものの、保育園は建物の地下に入った薄暗いところにあり、とても広いとは言えない。先生方はベテラン揃いで安心して子供を預けられそうだが、日本の保育園と比べて、特に優れているかと言われると、よく分からない。

イギリスの保育料の高さに悩まされているのは、一時滞在者として暮らす私たち家族だけではない。ロンドンのあるイングランド地方では、保育の公的補助は、3歳と4歳になった年の週15時間(年間38週)に限定されている。これらは「保育」というよりも「就学前教育」としての位置付けで、5歳からの小学校入学準備クラス(公立校であれば無償)に引き継がれる。3歳未満の子供を預けて働くなら、自己負担で、保育園や日本の「保育ママ」に当たるチャイルド・マインダーに子供を預けるか、ナニーやベビーシッターを雇わなくてはならない。所得や勤務先の登録状況によっては、保育料の一部を所得税の課税対象から控除させることもできるが、それでも負担は少なくない。おまけに、ようやく3歳になっても公的補助は週15時間なので、それ以外の時間は自分で工面しなければならない。

こちらに来てから、何度か、民間企業のサラリーマンや大学の研究者として働くお母さんたちと話す機会があった。ロンドンの平均世帯年収は高いが、それでも、保育料以上に高い住宅費や生活費の支払いを考えると、決して余裕があるわけではないことは想像がつく。こんなに保育料が高くて、一体どうやりくりしているのだろう。たずねると、みんな様に複雑な表情を浮かべて、「高いけど何とかするしかない」と答えるばかりだった。給料のかかなりの部分が保育料に消えていくのは、どのお母さんも覚悟の上なのだ。

しばらく前に、日本で保育園に関するネット上の書き込みが話題になったが、保育サービスに対する政策的葛藤を抱えるのはイギリスも同じだ。最近では、就学前教育の公的補助を週15時間から30時間に拡張させる計画が、物議をかもしている。政府の政策案を評価するNational Audit Office(監査局)が今年3月に出した報告書によると、多くの保育園は財政面で不安を抱えているという。すでに与えられている週15時間分の補助金収入は十分ではなく、保育園の先生の「善意」や15時間を超える追加の保育サービスをより高い料金で提供することで賄われている。就学前教育が30時間に拡張されると、この追加サービスで得られる収入が縮小されてしまう。そもそも、人気のある園にはすでに長いウェイティングリストがあり、30時間への拡張に耐えられるだけの子供の受け入れ余地もあまり残されていない。こうした園では、午前と

午後の2部入れ替え制をとりながら、何とか1人当たり週15時間分のサービスとほんの少しの追加保育サービスを提供している状況だからだ。

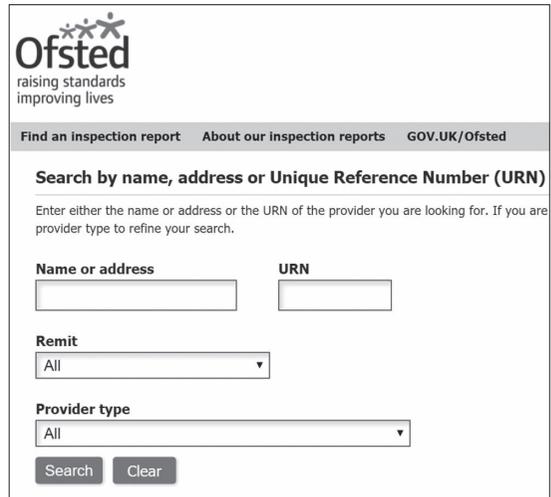
さらに同報告書は、政策にかけられる金額の大きさの割に目的が明確ではないとも指摘している。サービスの拡張が子供の教育に良い影響を与えるとするエビデンスはなく、親に対して実質的な補助金を与える以上に、具体的にどれほど親の就業促進効果が期待されるのか、明確な政策目標に欠けるといえるのだ。果たして、高価な保育サービスを社会が支えることに十分な政策的な根拠があるのだろうか。評価が難しいのは、どこの国でも同じなのかもしれない。

イギリスのお父さんお母さんたちは本当にシビアな状況で働いていると思うのだが、一方で、イギリスの保育事情でいいなと感じるところも、いくつかあった。その1つが、Ofsted（教育水準局）による検査とそのレポートの公開だ。Ofstedは、保育園から高校までの教育機関を評価付けしたり、一定の水準のサービスが提供されているかを監視する機関だ。基本的に、8歳未満の子供を1日2時間以上預かる保育サービスは、個人の登録チャイルド・マインダーも含め、全て登録と検査が義務付けられている。評価は、複数の項目について、「極めて優れている」「良い」「改善が必要」「不十分」の4段階で行われ、詳細なレポートとともに、Ofstedのホームページから検索して読むことができる（右検索画面参照）。

このOfstedの検査はかなり厳しいものだ。保護者などの第三者から、ルールに従っていないとの指摘がなされると、検査が行われ、その結果がホームページ上で公開される。例えば、ある保育園の給食の内容に問題があると報告されると、その保育園はOfstedの検査を受け、場合によってはOfstedの登録を取り消されることになる。

実は、3、4歳児に与えられる週15時間の無償の就学前教育は、このOfstedに登録される対象プロバイダー（保育園、小学校付属のナーサリー、登録チャイルド・マインダーなど）の中から親が好きなものを選ぶことができる。したがって、どのプロバイダーにとっても、この登録を維持できるかどうかは死活問題となる。保育サービスの提供者には、登録を取り消されることがないように、サービス水準を保つインセンティブ

が与えられ、そのことがOfstedの評価の信頼性を高める仕組みになっている。日本で最初に保育園を探すことになったとき、なかなか情報がなくて苦勞した経験のある私にとっては羨ましい制度だ。



Ofstedの検索画面。物件検索最大手のサイト（www.rightmove.co.uk）では、物件周辺の教育施設がOfsted評価のリンクとともに地図上に表示される。

我が家の保育問題は、在外研究が始まってすぐ、意外にすんなりと解決した。すぐ隣の通りに登録チャイルド・マインダーが住んでいることが分かったのだ。託児料金は、保育園よりも少し安くなるくらいだが、背に腹は代えられない。庭も広く、遊具も揃っていて楽しそうなので、そこをお願いすることにした。保育園ではなくて大丈夫かなと心配していたが、毎日、楽しく過ごしているようだ。家庭的な雰囲気で見えたらうのも悪くない。

高い保育料の分だけ、私の研究成果も上がってくれるだろうか。何年か経って、思い切って飛び出してよかった、と思える日が来てくれるといいのだが、こればかりは自分で努力するしかない。お迎えの時間とにらめっこしながら、一筋縄ではいかない研究に向き合う毎日だ。

おくだいら・ひろこ 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授。ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン Senior Research Associate（日本学術振興会海外特別研究員）。最近の著作に“Regulating the Timing of Job Search in the Entry-level Labor Market: Evidence from Japanese College Graduates.” 2016, mimeo. 労働経済学、応用計量経済学専攻。